

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

(財) 第五福竜丸平和協会

〒136 東京都江東区夢の島3-2
都立・第五福竜丸展示館内
電話(521)8494

太平洋諸国諸島民の

被ばくの実態調査と援護に向けて

ビキニ米水爆実験被爆二九周年記念日を前にして、二月に太平洋非核情報センター(P・C・R・C)からニュースが届いた。マーシャルの被爆者については日本のジャーナリストが機関誌に記載しているが、ウトリックについてはホルルのギフ・ジョンソン氏は、「低線量被爆のため、二〇三年に一回の健診であったが一九七六年に突然、被爆ウ島民の甲状線癌が被爆ロンゲラップ島民と同率の発生となったので、一九七七年以来しばしば健診されるようになった」一九五四年当時、ロンゲラップ、ロンゲリック、アイリングナエ、ウトリック四島が被爆地と限定されたが、その後の民間調査でオトジェ・リキエブ等でも被爆者が明らかになされ、より広い範囲のマーシャル諸島の医学的、科学的調査の緊急かつ重要なことを知らせてきた。

「広島・長崎以来、太平洋領域で二三八個の核爆弾が爆発した。一九五九〇一年、そして一九六三年の短期間の二つの休止を除いて毎年、太平洋で原子力は爆弾を爆発させてきた。一九四六年から五八年まで、マーシャルでは六六個の核爆発、仏領ポリネシアでは一九六六年以来九二個の核爆発があり、そのうち一九六六〇七四年まで、四一個の大気圏爆発があった。最近、仏ジャーナリスト、ルイ・ゴンザレス・マタ氏は困難を排して、核実験島近くの島民や、癌治療でパリへ送られたポリネシア人たちの会見に成功した。彼は次のことを発見した。一九七六年から仏権威筋は異常な癌の治療のため、ポリネシア人の大量グループを密かに軍用機でパリへ送

● 100万人参観者運動を

'83年2月来館者数	6,981名
3月来館者数	4,200名
通算1カ月平均来館者数	4,236名
当月1日平均来館者数	219名
通算来館者数	347,374名

った。最近の飛行の一つに五〇人のポリネシア人が全員、脳腫瘍で輸送され、パリ近郊の病院に収容された。病院の医師は彼に「ポリネシアの患者たちは仏核実験当時、若者だった」と語った。彼はこの患者たちが帰国した後、二九名とタヒチで会見することに成功した。その他の癌患者は個人的にニュージーランドで治療を求めた。即ち一九七五年〜七八年の間、或る病院では六七名の癌のポリネシア人を治療した。仏ポリネシア政府勤務の或る医師は、ポ人口の〇%は治療のために海外へ送られている。一九七九年の渡航者の九八名の中、三九名は癌患者で四〇名は子供達だったと語った。彼はまた、マルケサスやガンビア等のモロワ核実験島の近くの島民の中に、潰瘍、流産、胃障害等が高率に発生している異常を発見したのである。(後略)

太平洋諸国諸島民の被爆の調査と援護は益々、国際的広がりをもって今や進められているのである。(平和協会理事・本多喜美)

来館者の声から



対にとりほしめない。ここへきたのはほぼ一年ぶり。また別な意味で今日が三・一だったということもあって感動しました。

あらためて核の恐ろしさを感じた。アメリカはずうずうしい。(桐朋生)

核兵器は人間が造った物だから人間の手になくさなくてはならない。核兵器と人間は共存できないのだから。(中学校教師・今井)

今は、はったつして、船はつなのでできていくけど、昔は木でできていて、ふべんだと思っ

焼津を故郷にもつ人間です。年月を共に忘れさられようとしていく事実を語り伝えるのが、自分の役目のような気がします。(ウメハラ・一七才)

子どもたちがとても熱心にパネルを見ている姿が、とても印象的でした。心から平和の願いを。今年の夏はぜひ長崎へ行ってきました。(とまと)

久保山さんのさいごのことばのように、もう水ばく、げんばくで死ぬ人はいなくなつてほしい。こんど、このげん水爆のおそろしさを子どもたちにおしえるのは私だ!! (和光小・けいこ)

美しいビキニとエニウエトクをかえせ! 久保山さんの命をうばった水爆を世界からなくそう! (佐藤みづき)

将来教師になろうとしている私です。「教え子」を再び戦場に送るな! 私たちは侵略のための銃は絶

三・一ビキニ事件記念集会に参加して

「宇宙開発の将来と地球社会」の大林氏の話は、題名のとおり現在の状況が、具体的な例証を通して大変よく理解できました。ただ少し残念だったのは、核兵器が世界に百万発以上もあり、宇宙空間での核戦争などが具体的に準備されている現在、私達が今何を考えどう行動したらいいのかというところを多少とも話してもらえたらよかったです。

来年のビキニ被災三〇周年は、南太平洋の非核化の改たな決意と太平洋諸国民との連帯を強める足がかりの場に、記念集会は、マーシャルの代表者を招き、福竜丸のもとに集い、ぜひ展示館内で集会を開催することを要望したい。

同時に、三・一ビキニ事件を核兵器完全禁止核軍縮運動の起点と

した、今後も広範なそして根深い運動を続けていくことが必要だと思いました。(平和と軍縮をめざす連絡会・T)

編集後記

▼明るくなりましたねー! そう声をかけて下さる人が多い。そして船がよく見えるようになっていいですよ、とつけ加えられる。ビキニ水爆被災29周年の三月一日、第五福竜丸展示館の床の改修工事が三月月の難工事の末に完了した。本来の水平の床に戻ただけでなく、うぐいす色のシートが一面に貼られ船が浮き立つ。対応して従来、船の周囲にびっしり展示されていたパネルなどを整理し、テーマ毎に分類、船のまわりには一切のパネルを置かないことにし、すっきりしたものにと努力した。ライトにはえる第五福竜丸はD51機関車にも似てたくましく重量感をもっている。

▼新装なった展示館で、船を見あげながらひらかれた理事会。協会創立十周年(一九八四年十一月)めざし不退転の決意で原水爆資料室を展示館に隣接して建設することを誓った。

▼春。夢の島にタンポポが咲き、ひばりが高く舞い上る。船はみなさんの来館を心より待っている。

この小さな船の反戦反核の大きな叫びを

三・一ビキニ事件記念集会ひろく・展示館では写真展

死の灰から三〇年——一九八三年の三・一ビキニ事件記念日は核開発をめぐる緊迫した状況の中、焼津で広島で長崎で、沖繩、東京でいくつかの集会が力強くひらかれた。東京では、第五福竜丸平和協会が主催して日本教育会館で記念集会。百五十人余が集い、記録フィルム「死の灰」に放射能汚染の持つ恐ろしさを改めてかみしめ、当時の科学調査船俊鶴丸の乗船記



者加藤地三氏(昭和女子大学教授)の苦勞話に耳を傾け、「宇宙開発の将来と地球社会」と題する大林辰蔵氏(宇宙科学研究所教授)の記念講演に壮大なその将来と共に宇宙にまですすむ核軍拡の実態についても学び決意を新たにした。

久保山さんのことは守る

三・一当日の展示館は朝早くから人がいっぱい。和光学園の中学

展示館に隣接して資料室を建設

改装なった展示館で第53回理事会をひらく

三月二十五日、平和協会の第53回理事会がひらかれた。今回は床の改装なった展示館で船を見つめながら行なおうと、見違えるように明るくなった館内で開催、改装とあわせて行なわれた展示品の配置がえも一つ一つ確認し、展示館の充実強化などにつき熱心に討議を重ねた。もう一つの議題の中心は、懸案の資料室建設。

生はみんなで見学後、久保山さんの記念碑前で輪になって討論集会。核廃絶の願いをこめて折ったという千羽鶴が後日届けられた。都教組の先生たちもバス一台で特別見学会、今後各学校で第五福竜丸見学をすすめていこうなど話し合われた。九六四の瞳がこの日船を見つめたのだった。

太平洋の被ばく者の苦しみも

この日を期して三カ月に及んだ展示館の床面改装工事が完了。館内では「死の灰から三〇年、ロンゲラップの被ばく者はいま」(写真

真桐生広人氏)の特別写真展示が行なわれた。米軍ミサイル実験の基地クエゼリン環礁の一小島イバイ島に居住する被ばく者とその子どもたちに重くのしかかる放射能障害、30年の現実をまのあたりにさせた。

平和を問いかける船として

テレビ、新聞がいくつ三・一を報じた。東ドイツの特派員は世界の反核運動の特集として本國で放映すると半日館内をくまなく取材。朝日新聞大阪本社版(二・二六)夕刊文化欄のつた児童文学者・徳田純宏氏のルポは第五福竜丸を造った和歌山の船大工・南藤藤夫さんへのインタビューなどにあふれ素晴らしいもの。「黒潮あらう浜で、古座川を見下しながら南藤は語る。『あの船は私が兵隊から帰って初めて設計した船でね。平和を問いかける船として、いま私の造った船が残されるのはうれしい。』南藤はそういった。しかしまだ船との再会はしていない。』そして徳田さんはこう結ぶ。「世界の日本の軍備拡大がすすむ中だからこそ、この小さな船の反戦反核の大きな叫びを聞かねばならない」

死の灰から三〇年

非核太平洋をめざすミクロネシア

写真・文 桐生広人(一)

太平洋は未来を示している——とはベラウのモーゼス・ウルドンさんのことばであったか。私たちはもともと太平洋に目をむけたい。非核太平洋めざし、独立と自主のために奮闘する小さき島の人々の姿を。昨年十一月グアムでひらかれた太平洋非核化ミクロネシア会議とそれ以降マニラ・パラオなどを訪問した桐生広人さんのルポを六回の予定で連載する。

今年の2月10日、ベラウ共和国で行われた米国の自由連合協定の承認をめぐる国民投票の結果について、日本の報道は大変混乱していた。3月末日に來日した、ローマン・ベドール氏は、協定が発効するに必要な放射能質その他に関する項目に75%の得票をえられず、協定は国民投票において否決されたばかりか、憲法とも矛盾する点において議会でも否決された。報道の修正を求めた。私がベラウを日本の平和運動家らと共に訪れたのは80年11月のことで、7月には非核憲法が誕生し

10月には大統領が選出された。ベラウがこのような憲法をつけたのは、太平洋戦争で他國の争いにまきこまれ、多くの犠牲を強いられたこと。友邦の一員であるマニラ諸島島民が、米國の核兵器実験によって第五福竜丸とともに受けた深刻な核被害や、広島、長崎の核爆発がもたらした悲惨を回避すること。連合協定により強制されるであろう外國の核基地や放射性物質の海洋投棄に抵抗すること、などが主な理由であったと人々はいう。特に同系の民族、文化圏に属するマニラ諸島の核被害と、その後の米國の政策は、ベラウの核基地化に強い反対を表明するに十分な経験であった。

ちを歓迎した。大統領の妹であるマリア・レメリクは、「ベラウでは女達の役割は大変大きく、女達の同意のない決定は無効であり、そのために戦争の苦しみは女達の肩に重くのしかかった。その経験がこの憲法をつくるのに大きな役割をはたした」という。この時の女性たちは大変控え目にみえたが、後日私はすさまじい舌戦を目撃した。マニラにも劣らぬ話しぶりで一人で五分以上読けるのはザラ。話を引き継ぐには、相手をねじふせてからでないと権利はない。ベラウ国民はこの舌戦に勝ち

抜いて非核憲法をつくり、自由連合協定を一就したに違いない。また、非核憲法は他のミクロネシア諸地域にも大きな影響を与え、82年にはグアムで太平洋非核会議が開かれるにいたった。次回は、グアムの非核化会議をルポする。



太平洋戦争の惨禍をあげた多くの人は、非核憲法に最も強い関心を寄せ、憲法制定の推進力となった。